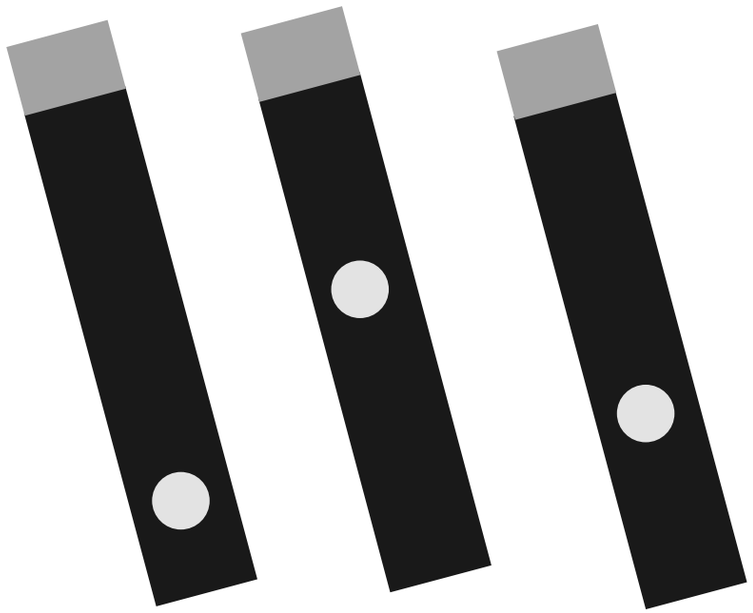
月　　刊

MAROAD

Vol.176



2022.09.25

詩と評論

月刊「Maroad」
Vol.176.2022.9.25
「月刊まろうど」編集部

◆見立てソネット

大西隆志

坂道の途中から崖を見上げて
重たい足の運びに齢をからめている
モノガタリをコンゴ川の上流へと進めていく
湿気や暑さにやられているのではない

車窓の内と外のように引かれたものはなく
流れ去るのは世界の喫緊の事態でもあり、もどかしいか
小さな弱い存在である僕らは歯痒いのだ
草を刈り、枝を落としている背にも陽が沈む

何もない方丈に花器はあり不在がある
よりそうこともなく、連続する人格は一定ではない
エーテルを象徴とした素朴さが懐かしいようだ

殺めた人の数を刻印していく悪意も忘れ
花の下に整列するのが美しいと感じているのか
見定めることの困難さを呼び寄せるのだよ

「月刊まろうど」176号　目次

詩・俳句

見立てソネット　……大西隆志　3

特別チケット終了　詠（俳句）……岩脇リーベル豊美　4
一番星（俳句）　……乾佐伎　5
(犬歯)もしくは前略／葡萄が食べたくなったとき　……いなだ豆乃助　12
麦色の風／ウクライナ　……原田ひでよ　13
泥と偶像崇拝　……中嶋康雄　16
自転する詩片　……大橋愛由等　17
「星の泡が、燃え盛りながら流れる」　……冨岡和秀　18
都鳥……野口裕　19
五月……黒田ナオ　19

翻訳詩

詩の海へ―英語翻訳詩④「チャールズ・ドネリー〈カラスの寛容〉」……安西佐有理　9

ART NOTE

珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）」⑧……はらだてつろう　8

連載小説

連載開始／「風景の隙間①」……リチャード・パーカー　10
『マルクスの場合』―②マルクスの統治　……諸井学　14
18回目／「海猫堂店仕舞記」……千田草介　15

連載 評論・エッセイ

ヨーロッパ一人旅　～スコットランド番外編～……モス堀渕敬子　6
レガートな日々〈3〉「フック先生」　……原田ひでよ　7
神戸詞（うた）あしび〈163〉「津軽紀行で出会った方言詩仮名表記のリアルな息遣い」……大橋愛由等　20

編集部だより★98／世代が替わっていく。二人の物故者と向き合う。詩人・森崎和江（1927-2022）。精神科医で翻訳家・中井久夫（1934-2022）。☆まず森崎和江について語ろう。三宮駅前古書店で買い求めた詩集『ささ笛ひとつ』（思潮社、2004）を読む。本書は2005年第14回「丸山薫賞」を受賞している。朝鮮半島で生まれ植民者として育ったことに対する贖罪意識を終生持ち続けた。「生まれたところ　そこがふるさと／などとわたしにいえるはずもない／そこはあなたのふるさと／／みどりごはねむり／うまれたところ　そこがむふるさと／などとわたしにいえるはずもない／そこはあなたのたましい」（「旅ゆくところ」）常にひと、情況、生の根元を見つめる詩人だった。「あなたはだれ／あなたの神話をおはなしください／音もなく色づくあなた（略）あなた／あなたの神話をおはなしください／あなたをおはなしください／さもないと／斬りすてます」（「波の花」）そのひと・こと、そのコトバがいかに生命の尊さを胚胎しているかを、自らに、そして他者に求めた表現者である。生前にお会いしたかったひとだった。☆つづいて中井久夫。Twitterにはこう書いた。「2022*09*07／神戸という地の縁もあって精神科医で翻訳家の中井久夫氏（2022年8月8日逝去）にいちどお会いしたことがある。田中紀子さんの詩集祝賀会に参加して会場から出て歩いている時だった。中井氏は「翻訳家というのは冬浴衣なんです」と発言。即座に意味が分からなかったわたしはどういう意味か問うた記憶がある。」「2022*09*08／博覧強記。知的刺激に満ちた文体。精神医学史の記述だけに終わらない文明誌。中井久夫著『分裂病と人類』（UP選書、1983）の「ロシアという現象」には「ロシアに強国であることを強い、そして〝ロシアに還る〟ことを強いたのは、おそらく西欧だった」。魔女裁判がなかった原生林が残る国ロシア。」／9月の例会・読書会はDr. Paul Allan Mossが担当。アメリカ出身で、獣医師。現在兵庫県赤穂市に住んでいます。テーマは、「アメリカから日本そして赤穂へ」（大橋愛由等）

◆特別チケット終了　詠

岩脇リーベル豊美

遠距離列車玉蜀黍の粒ぎゅうぎゅう
女帝の里女帝の天へ戻りゆく
船乗りの北海に打つ波に波
太陽コロナ呼びあう晩夏の工事現場
京鹿子裏の光に窓塞ぐ
夕鶴や市街地戦闘参戦す
夕月や右斜め上にずれ白魔術
秋祭り孤児村行きのバスに乗り
朝霧やオクトーバーフェストのコロナテスト

◆一番星

乾　佐伎

やあ元気ですかと光る水たまり
白雲の上には空いた椅子ひとつ
なんの音？　一番星がひかる音
少しなら孤独が好きだ薔薇ひらく
月光は届いていますエデンにも

ヨーロッパひとり旅～スコットランド番外編～

――モス堀渕敬子

イギリスのエリザベス女王が亡くなった。96歳だった。

ちょうど40年前の１９８２年の夏、エリザベス女王とフィリップ殿下がエディンバラに来られた時にお見かけした。

とはいえ小柄な私は大勢の見物人に埋もれてしまって、お二人の背中しか見えなかったが。

お二人が来られるということで、私やイタリア人の同級生は、語学学校の授業を抜け出してみんなで見に行ったのだ。きっと教室には誰もいなかっただろう。

日本の皇族は、影すら見たことがないので、お二人にはより親しみを持ってしまう。

ある日、ホームステイ先でテレビをつけたら、映画「クインメリー／愛と悲しみの生涯」を放映していた。スコットランド女王メアリーをヴァネッサ・レッドグレイヴが、エリザベス一世をグレンダ・ジャクソンが演じていた。メアリーは44歳でエリザベスに処刑されてしまうので、スコットランドにとって彼女は悲劇のヒロインだ。

しかし、子供のいなかったエリザベス一世は、メアリーの子、ジェームズを跡継ぎにする。そのために、若死にしたが彼女の血は今のイギリス王室に脈々と受け継がれているのは、歴史の妙と言えるだろう。

エリザベス女王は、スピーチの最初は必ず"My husband and I..."と言って、ご主人を立てていた。

若くして即位し、品も威厳もあるのはもちろんだが、ユーモアのあるチャーミングな女性だったと思う。

ご冥福を心よりお祈りいたします。

レガートな日々④

原田ひでよ

フック先生

八月二五日、師であるマルタイン・ファンデン・フック氏が亡くなられた。

六八歳のお誕生日、九月七日がお葬式であった。

フック先生に師事して、十年足らず。最後のレッスンは、五年前の秋。

それからまもなく、重い肺の病気に罹られ、長い闘病の末、ようやく回復されて、この夏は講習会の講師をなさるということで、私もそこに参加して、久しぶりにご一緒に勉強するのを楽しみにしていた。それなのに、三月にコロナに憑りつかれて、危ない状態をくぐりながらも、手術を受け、持ちこたえて、ゆっくりと回復に向かっていた、はずだった。

フック先生に出会って、私の人生は一八〇度変わった。フック先生はとてつもなく大きな存在で、私は、あまりにも多くをいただいていたが、ただもう一方的にもらっただけで、恩返しはおろか、そのことを伝えることすら充分にできないまま、二度と会えなくなってしまった。

先生がどれだけたぐいまれな、何もかも突出したピアニストであるかは、ヨーロッパ各地で、今もこれからも報道されるだろうし、フック先生の演奏を長年にわたり、たくさん聴いてこられた耳の、心のある方々が語り継いでくださるはずだ。多くの名門校で教鞭をとっていらしたから、志と音楽、演奏を理解して受け継ぐ才能ある方々がいらっしゃるはずだ。

私は、私個人が受け取った数々の教えと思い出を、書き記すべきだと思う。ただ、今はまだ、それは、とてもできそうにはない。

受けとめきれないまま、日々を過ごそうとするが、日常のあらゆることは、ピアノに通じており、ピアノのあらゆることは、フック先生と繋がっている。

喪失感と後悔が消えることはないだろう。

カーテンコール

―その人を知る人がひとりもいなくなったとき
人は初めて本当に亡くなるという―

ならば

何度でも呼ぼう
彼の名を
彼を舞台へ
鳴り止まない拍手で
眩い舞台の中央へ
何度でも　呼び続けよう
そして
耳を澄ませよう

ゆるぎなく構築された
巨大な建造物を
よどみなくほとばしる
透明な水しぶきを
誰をも包んだ暖かい
陽射しの明るみを
ボタンほどの小さな
鳥のさえずりを

ほら
届けに来る
足どりも軽く階段を降りて
あの笑顔で

何度でも
何度でも

届けに来る

届けに来る

（ピアニスト）

詩の海へ―英語詩の世界 ④

安西佐有理 訳

The Tolerance of Crows

Charles Donnelly

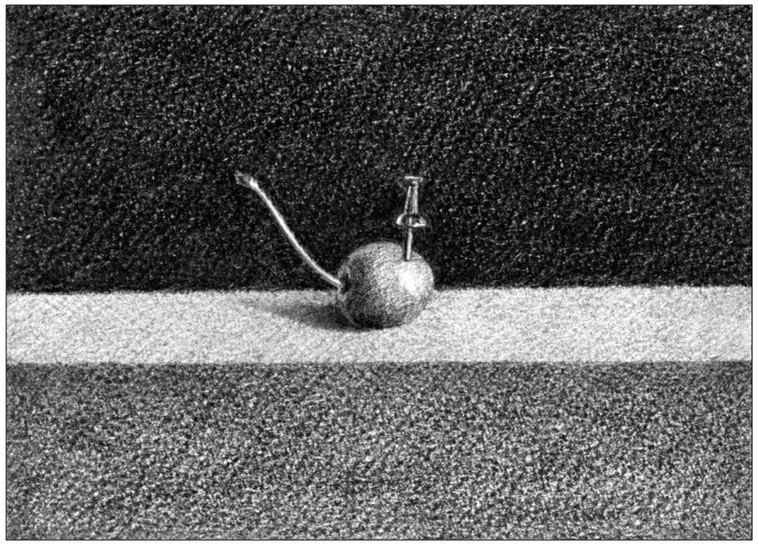
チャールズ・ドネリー「カラスの寛容」

Death comes in quantity from solved	死は大挙してやって来るのだ　解決済みで
Problems on maps, well-ordered dispositions,	地図にある問題から、整然とした配備と
Angles of elevation and direction;	射角や方角から
Comes innocent from tools children might	無邪気にやって来るのだ　子どもらが
Love, retaining under pillows	気に入って、枕の下にしまいこみそうな道具から
Innocently impales on any flesh.	屈託なく、どんな肉をも刺し貫いて
And with flesh falls apart the mind	そして肉と共に砕ける心
That trails thought from the mind that cuts	が思考を引きずりだした心が思考を
Thought clearly for a waiting purpose.	切り離すのは明らかに、待ち受ける目的のため
Progress of poison in the nerves and	ずんずんと毒が神経をめぐるので
Discipline's collapse is halted.	規律の崩壊は前進停止
Body awaits the tolerance of crows.	躯が待つのは、カラスの寛容だ

★編集部注／この詩作品は、神戸市・スペイン料理カルメンで行われた第25回ロルカ詩祭（2022.8.20）の第一部ロルカ関連詩のパーツにおいて、英文・翻訳とともに安西佐有理氏が朗読したものです。チャールズ・ドネリー（1914-1937）はアイルランド出身の詩人。スペイン内戦が勃発すると、国際旅団の一員としてスペイン共和派陣営に参戦。1937年2月27日マドリード郊外においてフランコ軍に包囲され、銃弾をあびて戦死する。その直前、彼の近くにいたカナダ人が「アイルランド部隊の野戦指揮官、チャールズ・ドネリーがオリーブの木の陰にしゃがんでいます。地面からオリーブの実をひと束拾い上げ、潰しているところでした。機関銃の銃撃が途切れた折、彼が静かに言うのが聞こえたのです。〈オリーブさえも、血を流している〉」と報告している。この〈オリーブさえも、血を流している〉=Even the olives are bleeding という言葉はスペイン内戦を象徴する表現としてさまざまな機会に引用されることになる。

ART NOTE―⑧

8 珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）



レッスン2―2の反省

・球を描く課題です。数学的に説明のできる球に比べ、桜桃の複雑な曲面を感じてください。

・光の方向は全部同じになりましたか？

○レッスン2―3　球とさくらんぼ

1　桜桃とプッシュピン

・プッシュピンは透明アクリルと金属でできています。質感の違いを捉えましょう。

・背景は三段階の明るさでシンプルにまとめます。

2　桜桃とプッシュピンを描く（課題の目標）

・透明アクリルと金属と桜桃の質感を明度の違いで表現することが技術的な課題です。桜桃が準備できなかったら球にしてください。

・プッシュピンを刺した桜桃を見て何かを感じること。

3　注意点（ヒント）

・プッシュピンと桜桃は出来るだけ写実的に描きましょう。（技術）

・「あっ、いたっ（痛そう）」と思いましたか？（違和感です）それが作品から受けるインパクトです。（内面化）ここで、「嫌い」という思考停止の言葉を出さないでください。

・桜桃を食べるときには感じることのなかった「痛み」を感じたことが思想の始まりです。つまり表現にとって重要な要素です。

はらだてつろう（美術家）

新連載小説

風景の隙間（1）

リチャード・パーカー

　それは、いくつかの台風が通り過ぎ、急に寒くなりはじめた秋口のことだった。いかにも曖昧な風体の青年が、なんとなく自分に似た性格の不思議な街にやってきた。あてもなくヨーロッパを徘徊し、その日暮らしのバイト生活で疲れた顔をして、年齢のわかりづらい国籍不明の都会人の雰囲気を持ったまま、雑種の犬のようにキョロキョロした表情で家を探していた。自転車を押していたが、それだけが大切な移動手段となるクロモリのロードレーサーだった。自転車には昔から乗り慣れていて、上手く隠すことも取り出すこともできた。自転車に乗ると透明になり、降りるといろんな自分を取り出す、そんな自転車生活者だった。

　神戸は坂の多い街だが、ゆっくりした傾斜の曲がりくねった山麓線は自転車に適した道だと彼は思っている。信号がなければ自転車レースもできそうなバス道だった。彼は「高橋です」と名乗ったが、「タカアシ」にしか聴こえなかった。「え、どう書くんですか」と聞かれると「高い足です」と答えるのだった。

　長田商店街の目立たない不動産屋で彼が紹介されたアパートは掲示板にも貼り出されていない訳あり物件らしい。高橋は予算に収まる安値というだけで三幸不動産のオヤジの後をついて歩いた。その物件は商店街からかなり登った坂道を曲がった所にあったが、裏山の斜面に張り付くように建っていた。二階建てだが二階は坂道をもう少し登った曲がり道からも入れるようにできていて、一階は空き家にしか見えないほど老朽化していた。

「ご覧のように、この家は二世帯住宅でして、昔は二階に息子さん夫婦が住んでいまして、そのご両親は一階に住んでいたのですが、いまは二階にお住まいになっております」

「へえ、二階にも玄関があるのですか。段違いに平行な道があるなんて神戸らしいですね」

「いえいえ、昔は段々畑だったんですよ」

「あまり日当たりはよくないですよね」

　そういうと高橋は押してきた自転車を庭の端に押し込んだ。そのまま隠すつもりだった。

　オヤジは質問を聞き流して、昭和風の玄関のガラス戸をガラガラと開いた。中に入るとセメントの土間に靴ベラが転がっていて靴も下駄も誰かが逃げた後のように脱ぎ散らかっていた。土間から板の床への高さはかなりあり、敷居が高いというより床の高い家だ。床に座らされた保険屋がお茶を出されて追い返される時のように奥の方には闇が詰まっているようで、黴の匂いがした。障子の隙間から見ると、次の部屋には家具の影だけが残っているようでガランとしていた。影なのか黴なのか、道にも部屋にも隅々には木炭で描かれたデッサンのような黒い輪郭があった。

　オヤジは奥には行かずに板の床から洋間のドアー・ノブを押し込んだ。ガタンと大きな音がして、小窓のあるドアが開いた。

「今なにかしましたよね」

　ドアは蹴飛ばさないと開かないようで、閉めるときにまた蹴り上げていた。窓のレースのカーテンは庭木の色に馴染んで緑色に見えた。

「家具を置くのはこちらだけにしてください。家賃は部屋の面積で決めていますから二万円です。便所と風呂にはこの廊下を歩いて行ってください。和室には人がいますから入らないでください。台所は誰も使っていない時に使ってください。冷蔵庫にはビニール袋に名前を書いて入れてください」とオヤジは冷蔵庫を楽しそうに開けたが空っぽだった。

「なんだかシェアハウスみたいですね」と家全体に興味が湧いてきた。

　高橋はこの部屋に決めようと思った。部屋には檜材でできたライティングビューローがあったからだ。

「これは使っていいんですよね」

「貸すのは私じゃないので、これから二階に回って家主さんに挨拶しましょう」

「ええ、ところで、この家の階段はどこでしょう」

「階段がないのですよ。いったん外に出て、坂を登らないと二階には行けないのですよ。面倒ですが」

「なるほど、二世帯住宅ですものね」

と言いつつ、この家には絶対に隠れた階段があるはずだと思った。部屋探しと階段探しは秘密の楽しみにすることにした。

　オヤジがベルを押すと、中から若い娘が出てきた。

「父は出ていますけど」

「お部屋を借りるという学生さんにしたお部屋を見てもらっていました。お父さんにはよろしくお伝えください。それでは」

　高橋は鋭い視線で彼女を見たことを後悔した。人よりきつく睨む癖があるからだ。

「僕は、もう学生じゃありませんけど」と言い足して、彼はオヤジのあとをついて行くしかなかった。家が気に入ったのか娘が気に入ったのかわからないまま。

　坂の上から下を見るとこの家の庭は荒れ果てて見えた。

「まるでジャングルですね」

　高橋は呆れ果てた顔で言った。

「どうして一階でそのことに気がつかなかったんですか」

「気がついたら帰っていますよ」

「・・・・・・・」

「もうひとつ、気になるのは家が裏山に接近しているし、間に竹やぶが生えていて、それがどこから生えているのかわからないことです」

「竹やぶはまっすぐ伸びているので、根もまっすぐに下に伸びているように見えるでしょう。でも、根は横にしか伸びないのですよ」

「それで？」

「竹は白いひげ根を感情のように伸ばしてゆくので、他の木を枯らし尽くすのですよ」

　高橋がこの部屋に住むようになってから、様々な奇妙なことが起こった。借りた部屋からトイレに行くには縁側の廊下を通るがいくつかの部屋の前を通ることになる。一体、誰が住んでいるのかと足音を忍ばせながらスリッパを滑らすように歩くのだ。すると突然、ドアが開いて二階の娘が出てきた。

「え、どうして一階にいるの？」

「お掃除ですよ。小遣い稼ぎだわ」

「どうやって二階から一階に降りてきたの？」

　廊下は階段に繋がってない。おそらく部屋の中に階段があるのだ。いくら二世代住宅だといっても、家の中に階段がなければ困るだろう。そう思いながらトイレを済ませた高橋は縁側から庭を眺めた。庭には手入れがなく、伸び放題の樹木と下草が大自然に戻ろうとしていた。自然林の中にこの家は建てられたのだ。これでは自然の中に朽ち果てるのを待つばかりだ。誰も庭に入る気配はなかった。

「この家の廊下の先には階段なんてないでしょ。あるのはトイレとバスルームだけでしょ」

「旅館じゃないものね、ここは便所と風呂場か」

「じゃあ、階段はどこにあると思います」

「さあ、隠し階段？」

「そうなの。大きな部屋にはそれぞれの階段があるのよ。プライベート階段よ」

と娘は嬉しそうにいった。

「なるほど、プライベート階段か。古風なメゾネットタイプですね。じゃあ、僕の部屋にも隠し階段があるの？」

「ないわ。だから貸し部屋にしたのよ」

「階段がないのが隠し部屋なんだね」

「そうね、階段があれば隠せないもん」

　自分は隠されるのだと高橋は思った。でも何のために隠されるのかわからなかった。

「つまり、君の部屋には一階と二階があって、いつでも一階に降りてこれるんだ」

「そうよ、だからこうしているんじゃない」

　その晩のことである。バイトから帰ってきて、部屋に戻るとドアを軽くノックする音がする。猫が身体を押し付けてドアを鳴らしている音にも聞こえた。

「ここよ。私よ」それだけ言うとノックの声は何処かに消えていった。

　次の夜も寝ているときに軽く三回ノックするような音が聴こえた。その度にドアを開いてみるのだが誰もいなかった。すると、これはドアを叩く音ではなくて壁を叩く音かもしれない。

「悪戯好きにも程がある。僕が好きなくせに恥ずかしいのか？」勝手に出るから独り言だった。

「ということは、この部屋にも二階に通じる階段がある。どこだろう」

　と思うと大きな希望が湧いてきた。階段の先にはきっと青空が広がっているに違いない。階段は屋上まで繋がっていて、太陽を浴びることも星を浴びることもできることもできるだろう。そこで彼女は待っているに違いない。

「お父さんはね、あなたに庭の手入れをさせようとしているのよ。以前は庭師に月に3万円払っていたのだからね」

　それだけ言うと声はまた消えていった。

　高橋の借りる部屋はこの家の玄関のすぐ横にあり、まるで守衛室のように窓から訪問者が見えた。いつまでも空き部屋だと思われているようで訪問者といえば白い猫くらいだ。白熊みたいに大きな猫は、門柱から屋根に飛び上がったり飛び降りたりする。その度にアルミ製の郵便ポストがドラム缶のような音を立てた。

　道に面したその部屋は近所の人々の声も聴こえたが、住民たちが何を話しているのか判らなかった。その雑談を聴きながら高橋は自分の声を聴いた。

「気がつくと、俺はあの娘を抱くことしか考えていないのか、そのためにこの家は異様にカラフルに見えてきた」

（つづく）

◆(犬歯)もしくは前略

いなだ豆乃助

愛情を取り戻すには、じゃがたらいもの皮を剝くに限ります　そこの包丁を貸してください
取り急ぎわたしはこれにて失礼いたします　ゴルゴタの丘に家を建てる約束を果たさなければなりません
なにせ家長ですから
地鎮祭までには髪を伸ばさなければなりません　黙っていましたがわたし、ポニーテールがユメなのです
まだまだ頑張ります　諦めません勝つまでは
って、いつあなたは買ったのですか？　ゴルゴタの丘を　あれはそうですね、昼前のことでした　昼前に飲
むペルノーは最高ですね　白濁するのは、気持ちがよい証拠です
それでは、よい返事をお待ちしております

◆葡萄が食べたくなったとき

いなだ豆乃助

一房の葡萄　　葡萄は葡萄で　　かしこ
お裾分けで　　その　　立派な
いただいた　　中途半端さに　　葡萄になりなさい
葡萄　　惹かれる　　ここで休憩
甘くもなく　　葡萄　　でも
酸っぱくもない　　立派な葡萄　　夏の暑さで
葡萄　　踏みつけられず　　葡萄は悲鳴をあげる
中途半端な　　干乾びてもいない　　ことはないので
葡萄　　立派な　　安心してください
でも　　葡萄　　葡萄はまだ
　　それでも　　食べられずに
　　お汁だけは　　生きている
　　出し惜しみせず　　精一杯に
　　充分に出してくれる　　葡萄は
　　べたつく手で握手されるのは　　まだ
　　嫌いだ　　葡萄
　　そうでなくとも　　汁
　　人が嫌いだ　　で、べとべとな

◆麦色の風

原田ひでよ

おふろあがりの　夕まぐれ
ガラス戸を　あけると
中庭のまあるい空の向こうに
コールタールのかなしみがある
麦色の風が　ほほをつつくと
かなしみは
ひたひたと押し寄せ
いっそう広がって
いつも　足もとまで来るのだった
ちいさいわたしは　それが
なんであるか　わからないまま
ゴムとびのくさりあみで　つないだ

今　ようやく
風がどこから来たのかを知る
風にやどる　きれぎれの調べをみる

ながいながい物語のおわり
終止の音を　鍵盤にあずけた瞬間
ゆだねられた風は
いざなう
約束のときをまって
散られずにいた　花びらを
それを果たす時空へと

◆ウクライナ

原田ひでよ

チェリストを志す学生が
弾く　そのひとつのことのために
戦火の街に　とどまっている

オーケストラのオーボエ奏者は
軍の音楽隊で
オーボエと　銃を
その手に握る

合唱団の少女は
壊されたものと
壊されてはいけないもの
それを伝えるために
唄う

◆『マルクスの場合』②マルクスの統治

諸井 学

わたしはしばらくポーチでマルクスと遊んだ。前肢を持って仰向けに転ばせると、勢いよく回転して起き上がった。庭のほうへ身体を向けて、尻を叩いてやると、喜んで玄関と庭の間を駆け回った。調子に乗って玄関から廊下に駆け上がって行き、奥から母に叱られて逃げ帰ってきた。そして、何とか言ってくれといわんばかりに、短い尻尾を振りながらわたしに向かって「ワン！」と吠えた。

わたしは玄関に掛けてあった鏡を外し、それを身体の後ろに隠し持って口笛を吹いた。マルクスは喜んでわたしのもとへ駆けてきた。わたしが隠し持った鏡を前に差し出すと、マルクスは鏡に映る自分の姿に驚き、慌てて止まろうと、前肢を揃えて踏ん張ったのだがコンクリートに滑り、すてんと転んで「キュン！」と鳴いた。そしてすぐに起き上がり、鏡に映ったじぶんに向かって勢いよく吠え始めた。鏡に近づいては跳び退き、また近づいては跳び退きして吠え、その独り芝居にわたしは涙を流して笑い転げた。そして、マルクスは鏡の後ろを覗いて嗅ぎまわり、やがて不思議そうな顔をしてわたしに向かって「ワン！」と吠えた。

昼間マルクスは独り庭で遊んだり、また昼寝をしたりしているらしいが、なかなかのやんちゃ坊主で、わたしは毎日のようにマルクスの悪戯を母から聞かされた。やれ観葉植物の鉢をひっくり返して割ってしまった。やれスリッパを銜えて行って隠してしまった。次は籐の椅子の脚を噛んで傷つけた。今度は洗濯物を銜えて取り返そうとする母と引っ張り合って破いてしまった。母の苦情は限りがなかった。

その間にマルクスの犬舎は内玄関から洋間の掃きだし近くに移動し、家の中を我が物顔で歩くようになった。やがては居間の籐の椅子を占領してしまい、庭を眺めながら昼間の大半をそこで過ごすようになった。大きな目を半ば閉じてマルクス・アウレリウスは瞑想に耽った。私の本性がなせと私にいま求めている行為を、私はなしているのである。（五・二十五）【注】そして、退屈すると洗濯カゴの中から靴下を銜えて母の前に現れた。

「また銜えている！　マル、放しなさい！」

母がこう叫ぶのをマルクスは計算ずくだ。マルクスは母と靴下を引っ張り合って楽しんだ。母に追いかけられれば最高の気分で家の中を駆け回った。

夕方になると、マルクスは母の足元を嗅ぎまわったのち、一声吠えて散歩の催促をするらしい。

マルクス・アウレリウスはこのようにしてわが家での地位を築いていったのだった。神々からは、よき家族と親族、おおむねよき友人たちに恵まれたことを。（一・十七）

【注】本文中マルクス・アウレリウス『自省録』からの引用は、中央公論社刊「世界の名著14」によるものです。章及び節は（＊・＊）で示す

（つづく）

海猫堂店仕舞記⑲

千田草介

〈ピンク〉が、べそをかいている。飼い猫十匹を元の猫のすがたにもどしたものの、月照寺境内を転がる〈猫球〉の数はまだ無数にある。「和尚さん、おしゃべりしてないで、なんとかして！」

「ピンクちゃん」住職は言った。「あんたが知っとる月の名を、あらいざらい言うてみなさい。そのぐらいは〈シゴセンジャー〉のメンバーのあんたには簡単なことやろ。飼い猫は〈たいたん〉で品切れでも」

「〈ふぉぼす〉と〈だいもす〉は、去年死んじゃったんですう」と、火星の二つの月の名を、泣きじゃくりながら〈ピング〉が言うと、二個の〈猫球〉が四つ足をはやした。しかし、どうも猫とはようすのちがう生き物である。

「おや、カワウソに転生しおったか」住職が言った。「さては、同じ食肉目のよしみというわけか」

「星々とて輪廻する」ミロクさんがつぶやいた。

「もしかすると、クマやパンダもあらわれるかな。しかし、このごろ檀家のお布施だけでは経営が立ちいかんから収入の足しにと幼稚園を併設する寺が多いが、さすがに動物園をつくるわけにはいかん」

涙をぬぐって〈ピンク〉がつづける。「ひぺりおん、やぺたす、ふぇーべ、てみず、やぬす……」

「おお、なんか真言（マントラ）をとなえているみたいやな」住職が私たちに言った。「われわれもやってみましょうか、ミロクさんも、あんたも」

「わしは真言なんぞ知らんよ」

と言うミロクさんに住職は笑ってかぶりをふった。「『がんじす河のまさごよりあまたおはする仏たち』を書かれたミロクさんが、なにをおっしゃるやら」

「恒河沙（ごうがしゃ）とは」ハーヴァード氏が横合いから口をはさんだ。「億、兆、京、垓（がい）……とさかのぼる大きな数字の呼称にあります。十の五十二乗が1恒河沙」

「おん、あぼきゃべい、ろしゃのう、まかぼだらまに、はんどまじんばら、はらばりたや、うん」私は暗記している光明真言をとなえた。

「あそこに月が」チャンドラが夜空を見上げて言った。三池炭鉱の煙突の上ならぬ、明石天文科学館の時計塔の上に皓々と月が照って出ている。

「ありゃ」ハーヴァード氏が舌打ちした。「せっかくポケットに入れた月が、いつの間にやら」

（つづく）

◆泥と偶像崇拝

中嶋康雄

もうどうしようもないです
赤ん坊の面影はもうないですから
焼け落ちた家
ビールを飲み干す缶を潰す
背骨が蛇みたいに曲がっている
轢かれアスファルトにへばりついた胴体
頭がまだ生きている
その頭を踏み潰すのは簡単だ
いやないやな臭いさえ我慢すれば
だれが偶像だろう
だれが拝むだろう
もういろいろなことが終わっている
もういろいろなことが黙っている
焼け死んだ人は何を取りに戻ったのか
うわさはうわさでしかない

泥の靴は履かれ続け泥の姿を
透明なビニールに閉じ込めなければならない
横から今さらだれが来る
だれが歌うか横断歩道の真ん中で
信号は赤だ月は赤だ欠伸が止まらない
素足に長靴でコンビニに行く
あれは
あれは誰だろう
うろうろするな
たすけてください
あれは
あれは誰だろう
こっちを見るな
首が三六〇度
服が破れているパンツは大丈夫か
笑われている殺す
暑いです台風です
しみったれ
コオロギが鳴いている

◆自転する詩片

大橋愛由等

拒まれた朝だった
白い息が夜明け前から
しれしれ固まったまま
たしか杳として
食卓の上で無為に回転している
飲みさしのオルーホが
笑いだしているようで
いや泣いているのかもしれず
飲みきれず躊躇う様態は
ヌースが季節のうつろいに
ついていけず
非非としているためだろう
昨日の地方紙の第二社会面の
擾乱記事から
ランチョンマットに

こぼれでてきた
五つの仮名と
六つの繁体文字が
わたしとぼくとわたしを
フルサトという幻影に
導こうと策謀するさま
無謀なのだきっと
出自の地の水は
内戦が終結して以降に
枯れたままなのだと
ぼくとわたしとぼくに
教えた妣は
食卓の上には必ず
絶望と苦海を7・3に調合し
粉砕するためのミール機を
置いてごりごりゴリ
挽きたての苦味と酸味の
絶妙なそのパッションを
「さあお呑みなさい
今日も蝶たちの
慟哭を聴くために」
とかあるいは

ひとつの仮名も発せずに
寂しい悲しいまなざしを
溶けはじめた
赫と碧の三角錐の石
にむけていた
わたしとぼくとわたしは
食卓横の十三段構えの
抽斗に隠れているつもりの
地峡をえいやと引っ張り出し
「見るがいい思惟するがいい
佇つしかない
それしかないのだから」
そうなのだ食卓脇で
部屋に浮遊し沈着する詩片を
蒐めることもなく
佇ちつづけるしかない
昼ざれもかはたれ刻も
拒まれたぼくとわたしとぼくは
出自の水を差延するまでもなく
蝶の慟哭を包摂するまでもなく
ただそれしか
この日々を生きていくのは

◆「星の泡が、燃え盛りながら流れる」

冨岡和秀

流れ星が光速度で遙か彼方に飛んでゆき、やがて落下するのが見える。それは光を放ちながら、地平線の果てに消え去るが、消え去ったあとには、その星の放った光はもはや存在しない。

そのものの不在を視線が確実に認めるとき、不在を根拠にその周囲の環世界を巡って観念の羽が回転する。流れ去った星と入れ替わりに、羽はやがて環世界への表層と深部へ向けて飛び立つだろう。

流れ星に触発されて、かつそれとは無関係に考えると、そもそも不在がなぜ用語矛盾のように存在するのか。間違いなく存在すると考えると言語矛盾の不在はあり得ないのではないか。こんなことを羽はつぶやく。

しかし、それにも拘らず不在は存在し、存在への扉を求めて、環世界への羽の回転運動へ向かうのである。そのとき、どういうことを羽は指し示そうとしているのか。

羽は自動化する物のように回転し、環世界をあちこち探索するために高速でジグザグ運動を繰り返す。

羽は視線を持ち、環世界を眺望し、ときにその地平を這うように見る。羽の視線は環世界をさまざまに見る。大きな物語は現代では死んだと言われたが、羽の視線はいま再び大きな物語が違う様相の下に復活しているのを見る。洪水は地球のあちこちの現象として現れ、気候変動が羽の眼に映る。羽は自らを大きく伸ばし新たな大きな物語として「人新世」の規模で、人類史をみようとする。

経済文明の「加速主義」に視線を放とうとする。資本の破壊的加速や科学技術の加速進展は経済成長を加速させるために国家と大集団が動めいている。

しかし、羽の眼は、小さな物語の乱立も忘れていない。精神と脳細胞の分化的視野が都市の中に自閉症スペクトラムを見いだして個のなかを見ようとする。その可能性は何処にあるのかなどとつぶやく。

グーグル翻訳ソフトが多言語に対応する世界を現実化し、バベルの塔の塔屋を超越して、あちこちの単一言語の声も多くの民族も、普遍的言語のなかへ渦巻くように吸い取ろうとする世界が現実化している。

目の前のユニバースと並立して、メタバースへの変容を果たそうとテックが進展する。WEB3は開始されており加速してゆく。貨幣は電子化しているが、さらにメタバースで仮想通貨が立ち上がっている。戦争はハッキングで始まり、ユニバースで人が戦死する。

そのような環世界の変容のなかでも、星の不在を、羽は意識しないわけにはいかない。消え去る星の光は羽の観念においては消えないで、うちなる光を十全に放とうとする。

「星の泡が、燃え盛りながら流れる」というルネ・シャールの言葉を胸に内包しながら、メタバースのなかでも、羽の意識は言語の光輝を放つ務めをやめないだろう。詩的言語でハックすることをやめないだろう。

◆都鳥

野口裕

ことばはそこにあり
また旅立つ
飛ぶかとどまるか
ためらいつつ
おおむね滂沱と
呆然と
日時計の舞だけが
揺らがぬ腰つき

今朝男は
ひとつ
年を重ねた

◆五月

黒田ナオ

ふる雨、
雨がふっている。
雨が地面に染み込んで染み込んで。
地面の下に、こっそり隠れて
聞いている
目を覚ましのびる音
誰かが誰かを呼んでいる微かな声
なにもかも溶けて、
五月はじっと待ち続ける。匂う、葉っぱ
にぎやかに飛びまわるものたち
もぞもぞ、蠢く。深く深く潜り込んだまま
土の中にいる。
ほのかな明るみ。

神戸詞（うた）あしび

163-2022.09.25 大橋愛由等

津軽紀行で出会った方言詩
仮名表記のリアルな息遣い

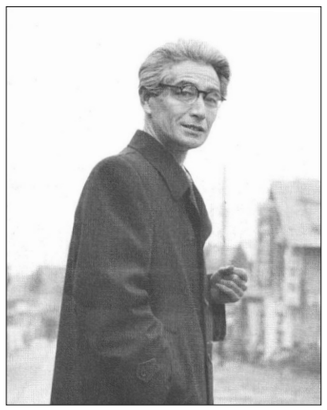
東北という地を訪れたのはこれで三度目。最初は学生時代、友人Sと北海道への気ままな旅をしたのち、Sと別行動を取り、青森県下北半島の恐山に向かった。1978年のことだったか。生者と死者がなまなましく交歓しあう場所である。死者が身近にいることを実感する。ゆらゆらとした生と死を超える境界に立っていることが肌感覚で伝わってくる場所。

二度目は21世紀になっていた。カルチュラルタイフーンの一環として、仙台メディアアークで、奄美・沖永良部から前利潔氏、与論島出身で東京在住の喜山壮一氏、アイヌに関する活動家である計良光範氏を招いてパネルディスカッション（2008.6.19）を開催した。テーマは「アイヌ・奄美・沖縄―まつろわぬ民たちの系譜〈記憶の更新／再構築〉」だった。

そして今回（2022年8月）の津軽紀行である。

神戸空港から青森へLCCが就航することになったのも今回の旅を企画・実行する大きなキッカケとなった。

8月1日、青森空港に到着後、目指したのは津軽の中心地である弘前市であった。ちょうどこの日から「弘前ねぷた祭り」が始まるのを目指していたのである。



弘前出身の詩人
一戸謙三

ねぷた祭りは夕方からの巡航なのでその前に、弘前市立郷土文学館を訪れる。こぶりな施設だが、展示内容は充実していた。会場では、「追憶と郷愁の詩人　一戸謙三」展が開催されていた。一戸謙三（1899-1969）は弘前市出身。口語自由詩のモダニズム詩人としてデビューする。のちに津軽方言詩を書くようになり、さらに定型四行詩へと表現形態を替えていく。

わたしが注目したのは、方言詩である。一戸は、詩集『ねぷた（津軽方言詩集）』（1936、十字堂書房）を上梓している。津軽方言で詩業を構築していた時代があったのである。津軽方言は、東北方言（北奥羽方言）のひとつと分類される。その特殊性は際立っている。その方言詩の一部を紹介してみよう。

弘前（シロサギ）
何処（ド）さ行（エ）ても
おら達（ダツ）ねだけァ
弘前（シロサギ）だけァえンたどこァ何処（ド）ネある！
お岩木山（コワキヤマ）ね守（まも）らエ（え）で、
お城（おしろ）の周（まわ）りさ展（フロダ）がる此のあづましいおらの街（アツ）…

――――（略）――――

夏（ナツ）ア夏で、
岩木川原（コワギガハラ）サ行（エ）て見（み）ろジャ
子供達（ワラハンド）ァ集（アツ）ばて水泳（ミツアツ）てるァネ
（思（おも）ひ出さねナ、ワラハンドの時（ブキ）！）
冷（シヤコ）グなた腹（はら）こサつける熱（あつ）エ（エシ）石、
アガスヤのすウナすヅ蔭（かげ）で、
午睡（シルネ）コしたゴトもあッたけァな…

驚くのは、方言部分において片仮名と平仮名の表記を共存させていることである。こうした表記の仕分けは方言話者による内的必然がもたらしたものであろう。同時にこのような表記は、近代となって日本語表記が標準化（平準化）される以前の、漢字と二種類の仮名の多様な使い分けを彷彿させるものである。

―誌名変更のお知らせ―

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、170号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 Mélange」発行当時（2005年）から17年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。（大橋愛由等）

2022年09月25日　通巻176号
発行所／月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価660円(税込)